

『人生地理学』と環境問題

『人間生態学』の視点から

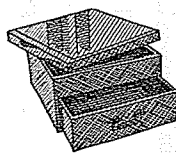
山本修一

1 はじめに

牧口によって『人生地理学』が出版されたのは一九〇三年、今世紀の初頭である。「地理学の意義を確定することは、本書における最大至難の問題たり」(5-213:附)と、牧口は本書の最大の目的は地理学の意義を明らかにすることである、と述べている。何故か。「かくのごとくにして吾人は生命を世界にかけ、世界をわが家となし、万国を吾人の活動区域となしつあることを知る。しかしてこは実に二十世紀の開明に際会したる吾人のなさざ

らんとすともほとんどうべからざるところにして、また、まさになすべきところのものなるを知る」(1-26)と、その理由は今世紀の初頭にあっていかに人間活動が拡大しつつあるかを自覚するがゆえである。その牧口の問題意識に最も適合する地理学の意義を明らかにしたい、その意思表示である。

フランスの科学者でもあり、哲学者でもあったビュフォンは、はじめて地球の歴史的發展の体系化を試みた人であった。彼は一連の大作『博物誌』(1769-1788)全四十四巻の中で地球の歴史を七段階に分け、その最終の第



七番目を人間が自然の力を補佐する時代と位置づけた。

半谷 (1988) はデュフォンのこの考え方を継承して、「人間社会の活動が地球に生じる現象に関与してくることを地球の社会化」と呼び、一九六六年に『社会地球化学』を著し、新しい学問体系として提唱した。その社会地球化学の本質的な目的の一つは、「人間がもつ人間観、価値観あるいは宇宙観などの地球進化における役割を解明すること」と、半谷は述べている。

現在および未来の地球は、人間の活動を抜きに語れなくなっている。しかし、その人間の人間観、価値観、宇宙観に基づく活動は、自然環境から反対に影響を受けて形成される。すなわち、人間と自然は相互に影響しあう。人間を主体に両者の関わりを明らかにすることは、まさに人間の生態を明らかにすることに他ならない。

「人間の生態」という観点から『人生地理学』を読むとき、歴史的な意義だけでなく、現代的な意義が明らかになる。本論では、本書を「人間の生態」という問題意識から捉え、その特徴および現代的意義を考察する。

注：本論では「人生地理学」の引用はいずれも聖教文庫版全

五巻、一九七一年発行による。以下本書の引用は巻およびページを (p. 23) の様に記載する。また、『創価教育学体系Ⅱ』も聖教文庫版、一九七二年発行による。本書の引用は、ページのみ (3) の様に記載する。

2 「人生地理学」の視点

『人生地理学』について論じたものは、熊谷 (1988) や村尾 (1980, 1983) 等がある。そこでまず、これらの意見も参考にしながら、牧口の視点の特徴的なところをまとめてみる。

牧口は『人生地理学』の定義として、「地球の表面に分布する自然現象と、人類の生活現象との関係の系統的知識なり」(p. 28) と述べている。この「地球の表面に分布する自然現象」を「地」といい、「人類の生活現象」を「人」として、その両者の関わりを「地人相関」として表現している。その「地」、「人」および「地人相関」をどのような視点で捉えているのだろうか。

2-1 「人生地理学」の構成

本書は四編からなっている。第一編は、「人類の生活

処としての地」で、十三章からなり、日月および星、地球、島嶼、半島および岬角、地峡、山岳および溪谷、平原、河川、湖沼、海洋、内海および海峡、港湾、海岸といった様々な地理的現象を、人間の生活場所という観点から、これらの地理が人間の社会生活や心情にどのような影響を与えているか、について論じている。

第二編は、「地人相関の媒介としての自然」で、無生物、大気、気候、植物、動物、人類の六章からなっている。これらのものは単独にも人生と関係すると共に、地理的現象とも関係する。ゆえに「地」と「人」とを媒介するものとして第一編とは区別している。

第三編は、「地球を舞台としての人類生活現象」で、社会、社会の分業生活地論、産業地論 (上) (中) (下)、国家地論、都会および村落地論、人情風俗地論、生存競争地論、文明地論の十章からなっている。社会・人文科学的な内容であるが、地球を舞台にした社会生活という視点が特徴となっている。

最後の第四編は、「地理学総論」で、地理学の概念、地理学の発達、地理学の名称ならびに人生地理学の科学

的位置を論ず、地理学の研究法、地理学の効果および必要の五章からなっている。ここでは特に『人生地理学』

の特徴を、他の地理学と比較して述べられている。

したがって『人生地理学』は、人間と自然との関わりを自然科学・社会科学・人文科学の学際領域にまたがる問題として捉えようとしたものであることが、一瞥できる。またこの構成は、「地」としての自然現象が最下層にあり、その上に人間の生活現象と「地」との媒介項としての動植物や気候をおき、さらにその上に社会・人文現象をおくといった階層構造を念頭に置いた構成になっている。

2-2 「地」と「人」

『人生地理学』でいう「地」とは、「地表の部分」をなす自然現象、地表に直接関係を有する自然力、自然物等のみ、人生地理学の目的物となる。……地球の表面に分布するもののうち、人類の生活に直接関係のある部分のみ、人生地理学の範囲内に入る」(p. 29) として、地表の自然現象の中でも特に人類の生活に関係するものだけが

『人生地理学』の対象になっている。

「人」とは、『人生地理学』という本書のタイトルを見てもわかるように、「人生」を指す。牧口はこの「人生」の説明として、「人の一生」という意味と「人間の生活」という意味の二つがあることを指摘し、ここでは後者の「人間の物質的および精神的の両方面の生活を意味し、したがってその中には、経済的、政治的、軍事的、宗教的、学術的等、諸般の生活を包含す」(1-15)といっている。しかしこれでは、人類に関わるすべての現象が含まれてしまうが、ここでもさらに限定して「地的現象に直接関係あるもののみ、攻究の対象内に入る」(5-219)として、人生現象の中でも地的現象と関わりのあるもののみが、その対象であることを明らかにしている。

では牧口は、その「地」と「人」はどのような関係をもっていると考えていたのだろうか。「すなわち人間は地上に生まれ、地上に棲息し、地に育せられ、地に啓発せられ、地上に活動し、地を利用し、ついに地に死骸を遺して逝く」(2-6)と、「人」がいかに深く「地」と関わっているかを指摘する。そして吉田松陰の「地を離れ

て人無く、人を離れて事無し。人事を論ぜんと欲せば、まず地理を審らかにせざるべからず」(1-15, 5-305)を本書の冒頭と末尾に二度も引用していることから、いかに重視していたかがわかる。すなわち牧口によれば、「人」と「地」とは切り離すことのできない相即の関係にあり、両者をそれぞれ別々に切り離して論じることはいかなることである。

2-3 価値の対象としての「地」

牧口は後に著した『創価教育体系Ⅱ』の序文で、『人生地理学』と価値との関係にふれている。「尚不思議なのは拙著『人生地理学』との関係である。『人生地理学』は地人関係の現象を研究対象と為し、その間に於ける因果の法則を見出そうとしたもので、全く価値現象を研究して居たのである」(6)と、『人生地理学』で追求してきたことは実は価値の追求であったことを、このように述べている。

ここで、『人生地理学』は価値現象を研究していたとは、いったいどういうことであろうか。牧口がこの考え方の

依所としていたのはリッケルトの考え方である。それは、

「自然とは没価値の現象であるが、文化とは価値に関係した事実である。而して此の場合に於ける価値とは一回的の個別性なるが故に価値を有するという意味ではなくて、吾等の理想に関係するが故に価値を有するという意味の文化価値である」(3)と、文化は価値に関係した事実であり、またこの価値は人類の理想に関係するゆえに文化価値となることを主張している。その上で「歴史の対象が価値であると同様の意味に於て、地理学の対象も価値である」(3)。ゆえに、『人生地理学』は価値現象の研究であり、牧口の言う「地」は価値の対象としての「地」という意味になる。したがって、牧口にとって価値の対象となり得ない「地」は『人生地理学』の対象とはならない。これを牧口は、「自然地理学上いかにおもしろき現象なりとも、そが人類の生活になんら著しき関係なくば、人生地理学において顧みるの必要なく、……これに反して自然地理学上より見れば、なんらの興味も価値もなき事項にしても、そが人生に著しき関係あらば、人生地理学においては、これを特筆大書す。」(5-228)と、学

問上の姿勢を明らかにしている。

では、「地」と「人」との価値的考察を具体的にどのように進めたか、その分かり易い例を以下のように書いている。「ここに一筋の水流あり。これを自然地理学の上よりすれば、その水流はいかにして生ずるか、なにゆえに流るるか、いかなる状態において流るるか、いかなる影響を周囲の土地ならびにその他の自然界におよぼすべきか、附近の生物界にいかなる影響をおよぼすか、要するに周囲の自然界といかなる関係を有するかの問題に答え、もって同種類の現象に共通の概念および原則に達せんがために観察し、その間に人類生活上に対する便否、利害等の考えは毫も包含せず、単に一般普通概念の概念を抽象しうれば足る。しかるにこれを人生地理学の上よりすれば、その水流がいかなる影響を人類生活に与うるか、その水流は周囲の自然界にいかなる影響をおよぼして、人生に間接に影響するかの問題に答えんがために観察し、もつていずれの水流にも包含せらるる、すなわち同種類に共通なる一つの原則を得んがために努力す」(5-227)。

このように一般の自然地理学と『人生地理学』では両者の着眼点は全く異なり、対象の取り扱いはいくく異なることを述べている。すなわち『人生地理学』では、人生にどのような価値があるかがその重要な視点となる。熊谷(1978)は、この牧口の捉え方を真摯の考察と価値的考察に分け、牧口は真摯の考察を価値的考察の基礎あるいは手段として位置づけ、この価値的考察こそ『人生地理学』の特徴であることを指摘している。

2-4 「人」の「地」との交渉と「地人相関」

では、牧口は「人」は「地」と具体的にどのような交渉をし、そしてどのような価値を見出すことができるかと捉えたのであろうか。「人」と「地」との関係がいかに複雑多様なものであるかは、誰しも認めるところである。牧口自身もそれに関して「吾人の身心が外界に交渉することのいかに千態万様なるかを知るを得。この多様にしてかつ複雑なる交渉を彙類することは、もとより至難のことに属するや論なし」(1936)と述べ、その関係がいかに複雑なものであり、分類することの困難さを述べて

いる。

牧口は、「人」の「地」との交渉をまず肉体的交渉と精神的交渉に分ける。肉体的交渉は、「地上に生まれ、地上に棲息し、周囲の影響を受けて生長し、あるいは知らず識らずの間に外界に反動し、もってある変化を周囲に与う」(1936)ことであり、精神的交渉は、「外界によって警醒せられ、周囲によって啓発せられ、あるいは故意に地上に活動をなし、外物を利用して自己の力に服従せしめ、外界にある変動を与うる」(1936)ことである。つまり肉体的交渉は、動植物の交渉と同様に意識しないで行うのに対して、精神的交渉は意識的に行われるところにその区別がある。

さらに精神的交渉は次の八つに分けられている。

知覚的交渉…観察を基盤とし、他の精神的交渉の基礎となるもの

利用的交渉…交渉のうち最も重要なもので、自然の利用

用だけでなく、自然の人類におよぼす害

悪をも含み、利害的交渉の方が適当。

科学的交渉…自然の因果的関係の法則を追求し、考察

すること。

審美的交渉…自然の美、調和、秩序に感動すること。

道徳的交渉…自然の美に感動した心は、清浄となり、

道徳心を触発され、それが生き方に反映される。

同情的交渉…無生物、動植物も父母、兄弟、朋友と同

じく、自分自身と一心同体のものとして苦楽を共にするような場合。

公共的交渉…人間は社会の恩恵に浴するだけでなく、

属する社会と運命を共にすることを感じ、公益の精神、愛郷の念、愛国心などをもつ場合。

宗教的交渉…自然界の調和・秩序に畏敬の念を抱くと

共に、自然の強大な力の前では人間の微弱さを感じ、宗教心を抱くような場合。

これらの「人」の「地」との交渉は、人間各個人の多方面にわたる交渉であって、社会という立場では各個人を通じて交渉が成立する。それを物質的な方面と精神的な方面から捉えている。物質的な方面では、経済的生活、

政治的生活であり、精神的方面では学術的生活、審美的生活、道徳的生活、社交的生活、宗教的生活となる。牧口の捉える「人」の「地」との交渉で重要な点の一つは、その交渉が多義にわたり、それぞれの交渉を通じて様々な価値を見出す源泉として捉えていることである。それは、先に述べたように『創価教育学体系Ⅱ』へと受け継がれて行き、結論的には「美」「利」「善」の牧口独特の価値論へと集約されることになる。

もう一つの重要な点は、これらの交渉が「地人相関」における「相関」の具体的な内容を表していることである。先に引用した肉体的交渉あるいは精神的交渉の説明で述べているように、「人」は「地」から「影響」および「啓発」を受けると共に、「地」に「変化」および「変動」を与える。つまり「人」と「地」は相互に影響しあうと捉えている。さらに「いずれの地も、ある程度まではすべての人民に対して、同様に諸般の交渉をなすべきものなれども、その各方面の交渉の程度は、その地方の性質と、これに対する人民の性質とによりて異なるものなり。もっとも人民の性質というも、そは主として各人

民の心性の発達に階級に基づく」(p.28)と、「人」の性質・心性の発達程度によって交渉の程度は異なる、ということである。したがって、牧口の捉える「人」と「地」との交渉は、互いに影響しあう相関的なものであると共に、交渉の程度は「人」にとって相対的なものとなる。このように牧口の捉える「人」の「地」との交渉のあり様Ⅱ「地人相関」は、人間の文化・社会的な活動によって相対的・相関的にダイナミックに変化することを意味している。

2-5 自然把握の方法

先に述べた「人」の「地」との精神的交渉は、さらに「経験」と「交際」に分類されている。ここで「経験」は「外界の事物を自己と対峙せしめて、単に経験の材料となし、事物を自己とまったく異なる客体となし、虚心冷静に接触し、これを観察し、これを推究し、これを判断するの点において一致す」(p.29)とし、また「交際」は、「吾人の精神は他の一方面において外界の事物を自己と等しく世界の一部と見做し、自己も等しくこれらの

事物とともに、世界の一部をなして生存するものと観じ、自己の生存に対しては、親密の関係を有するものとして、外界と交渉をなすを観る」(同上)ことである。そして「経験」は知的交渉を表し、「交際」は情的交渉を表すとする。「されば吾人は経験によりて知識を広め、交際によりて心情を涵養するなり」(同上)と、牧口は「人」の「地」との交渉により、「人」は自然から知識を得るだけでなく、心を涵養する対象としての自然も見ている。

牧口は『創価教育学体系Ⅱ』の中で、この経験と交際にふれて「経験と交際との二語は、明らかに、この両作用を区別的に表現したもので、認識と評価との両作用に当ると余は説く」(3)と述べている。すなわち、「経験」は客観的に真理を認識するのに対して、「交際」はその価値を主體的に評価することである。ここまでは先に述べたように、「地」を価値の対象としてみることであり、牧口はさらに一歩進めて、「精神界でも、自然界でも、物の真相を知らんとせば、経験と交際との両作用の円満なる全体的活動を要し、その一つを欠いては偏見に陥るのである」(4)と、自然の真相Ⅱ自然全体も客観的な真理

の追究だけでなく、その価値を主體的に評価することによってはじめて自然全体を把握することができる、ことを指摘している。

このような牧口のその価値を主體的に評価する自然把握の仕方は、随所に見出される。例えば、山、植物、動物に対して「山は人情を和らげ、人心を啓発するの天師たるをや。かならずや山によりて愛護せらるる国民は、山を見ること、あたかも子の親におけるごとけん。誰か山を愛せざるものあらんや。

ここに至りて、これまで自己と相對峙し、自己と異なりたるものとせる山は、今や自己と同じく世界の一部員となり、自己と相関の交際あるものとなり、ここにまったく有情物と化す。すでに有情なる交際物と化す。これにおいてか、吾人は山と一致せるものとして、ともに苦樂をともし、山が受くる運命とともに経験するの感起くる」(p.219)、「植物は吾人の美情を興奮し、吾人の殺氣を緩和し、吾人の詩趣を発酵し、もって吾人の心情を涵養するものなり」(p.220)、「吾人の従順なる伴侶とし、はた親愛なる慰藉者として、日常の生活に纏綿するの諸

種の動物によりて吾人の心情が涵養せられ、叙暢せらるることのすこぶる多大なる」(p.220)。このように主體的に自己にとって山、植物、動物の価値を評価することによってはじめてそれらと自己の関係を把握し、自然全体を知ることができる。ここに牧口の自然を見る独特の把握方法がある。

3 『人生地理学』の思想とその意義

3-1 先駆的な人間主体の環境観

現在環境という言葉は氾濫している。しかし、一口に環境といっても内容は異なることがある。環境というのは、主体となるものが何かを明らかにしなければならぬからだ。例えば、「環境を守る」という場合にも、主体が人間の場合もあれば、動植物や自然景観といった自然である場合もある。これでは曖昧なので、人間の環境の場合には、環境保全といい、自然環境の場合には、自然保護というのが一般的になっている。牧口の「地人相関」という場合、「地」と「人」のどちらが主体かと言えば、「人類の生活現象をその主題とす」(p.219)とある

様に明らかに人間の生活にある。したがって、牧口の捉える「地」は「人間の環境」そのものである。

しかし「人間」といっても抽象的・観念的な人間を指す場合もある。牧口の場合には先に見たように、生活する具体的な人間であり、「地」と切り離すことのできない人間である。さらに、環境を客観的に認識する（経験）だけでなく、主体的にその価値を評価する（交際）、そうしてはじめて牧口のいう意味での「人間の環境」になる。

このような捉え方は、日本で独自の生態学や『自然学』を築き上げた今西や、生態学や環境教育の分野で著名な沼田の生態学的な捉え方と一致する。今西は、古典的名著『生物の世界』（1972）の中で、生物とその環境について「われわれは今まで環境から切り離された生物を、標本箱に並んだような生物を生物と考えるくせがついていたから、環境といい生活の場といってもそれはいつでも生物から切り離せるものであり、そこで生物の生活する一種の舞台のようにも考えやすいが、生物とその生活の場としての環境とを一つにしたようなものが、それが

ほんとうの具体的な生物なのであり、またそれが生物というものの成立している体系なのである」と述べている。

沼田（1982, 1984）はさらにパブロフの実験を通して、主体による環境評価を捉え、「環境とは、たんなる外界ではなく犬の生活に意味をもつものにくみいれられた時、はじめて環境に値するものとなる」として、これを「生物主体的環境観」と呼んでいる。そして、今西が『生物の世界』（1972）で「生物の認識しうる世界がその生物にとつての環境」だといったのも同様の意味だという。

このような「生物主体的環境観」は、近年ますます重要度を増しつつあることを、沼田（1988）は「生物をとりまく外界の条件イコール環境という考え方は最初の規定であつたが、その後ユクスキールの『生物から見た世界』やパブロフの条件反射説などにみるような、生物の側からとらえられた主体的環境こそが環境であるとする考え方が強くなった」と述べている。そして最近では植物や動物の生物主体の環境評価、すなわち生物の側からの環境の評価が生態学者によって試みられるように

なっている事実を指摘している。さらにこのような生物主体的環境観は生態学の原点であり、これは単なる哲学ではなく具体的な研究の指針になるものであることも指摘している。そして、「環境問題に対してはまさに人間主体的環境の評価が要求される」と、「人間主体的環境観」の重要性を訴えている。

したがって、牧口の人間主体の環境評価は、学問的にもまさに現在要請されている方法論を先取りしたようなものである。その意味で牧口の「地人相関」における「人間主体的環境観」は、環境論議などまったくなかった時代にきわめて先駆的な意味に於ける環境観を描いていたことになる。

3-2 独創的な自然全体の把握方法

客観的な真理の認識だけでなく、主体的に環境の価値を評価することによってはじめて自然全体を把握することが可能になる、ここに牧口の自然把握の特徴があることは先に述べた。これは主観・客観を止揚したものとともいえる。

このような自然を全体として把握するような方法は、

今西の求める自然把握の仕方と酷似する。今西は『自然学の提唱』（1986）の中で、自然科学者は自然を客観的に見るが、これはみる方の自分と自然とを切り離して対応する。この切り離すということが、自然科学のみならず西欧の論理を貫いているものである。「花は美しいとか、鳥の鳴き声がきれいだ」とかそういうものはみな主観であつて、自然科学者は取り上げない。しかしこれは自然全体を知ろうとしない。結局専門家は自然の部分を調べて部分的には詳しくなるが全体については一向に知らない。しかし全体的な自然はいつも自分の目の前にある。これこそ一般人の立場であつて、ここに、自然を自然のままに全体としてみようとする立場があることを指摘している。そして「そういう立場は切り離すのではなくて、むしろ自然と一つになる、自然にかえる、あるいはまた自然に抱かれるということ」である、と述べている。

今西も、このような主観を含めた自然全体を把握する方法だけでよいといっているのではない。自然科学的な

自然観の外に全体的自然をみる観方というものがあることを忘れないことである、とも指摘している。そしてさらに「学問の世界に人間（主観）を持ち込むことはいけな」と考えている学者が多い……脱個性までいったらそれではたしてなにが創造できるのかといいたい」（『自然学の提唱』1986）と、現在の学問が客観性を重んじるあまり個性的な学問の創造がない現在の学問のあり方に対する疑義であると共に、今西の学問観でもある。

では、なぜ今西がこのような『自然学』を提唱するようになったか、それは学問的伝統の浅い日本Ⅱ学問的植民地に生まれたからこそであり、西洋的学問の伝統の根が浅いからこそ、その伝統にとらわれないで、自分の『自然学』を構想できたことを述懐している。上山は『生物の世界』（1972）の解説で、今西のことを単なる生物学者ではなく明治以来の数少ない独創的な哲学者であり、哲学から生物学への道をつけた、と、評している。そしてなによりも、従来の生物学が死物としての生物学であったものを生き物の学への転換を示したものの、とみている。

このような現実の中で自然保護を推進しようとするとき、『人生地理学』から学ぶべき教訓は数多くある。いわば、自然保護のための規範の前提ともいえるようなものである。それは、（1）自然を自己と同等あるいは自己よりも高い位置に押し上げること、（2）自然は豊かな価値の源泉であること、（3）自然からの価値創造こそ人生であり、そのためには人間の側で努力が必要であること、（4）他者への利益と自己への利益の相互利益を前提とする必要があること、である。

自然はどのような境遇の人間にとっても、常に広く公平に開かれている、と牧口はいう。そこで自然に対して「ただ至誠と同情をもつて、怯じず臆せず、無遠慮に無邪気に、肉迫して求」（1966）めれば、あるときは先に見た「山」のように親子、同胞となり、あるときは「真に吾人の啓発者たり、指導者たり、慰藉者たり」（1988）というように、牧口は、（1）自然を自己と同等あるいは自己よりも高い位置に自然を置いている。

こうしてはじめて牧口のいう多様な自然との交渉が可能になり、（2）自然は豊かな価値の源泉となる。この

同様のことが牧口の場合にもいえよう。牧口の場合には、大学や研究所で学究生活をおくってきたのではなく、常に現場の教師として、また生活者として自然をみてきたその経歴のなせる技かもしれない。だからこそ、伝統的な学問的方法論に拘泥しないで独自の方法に基づく自然把握の方法を確立したものといえよう。また、上山と同様な言い方をすれば、同じ明治期に生きた牧口は単なる地理学者ではない。当時の知識羅列型の死に体の地理学を、生きた人間を主体にした地理学に築き上げ、さらに哲学から地理学への道をつけたものと評価されてしかるべきではないだろうか。

3-3 自然保護の観点から

現在自然景観の破壊、野生動植物種の絶滅が世界各地で起こっており、これらの人間による行為を止めることができないれば近い将来には地球の生態系は多大な損傷を被ることが指摘されている。しかしながら、現実はある有効な対策・手段を行使できていないことも事実である。

自然の価値の見直しは、現在多方面から行われている。どのような自然の価値が検討されているのだろうか。『世界環境保全戦略』（1983）の著者として知られるアレンは、人間にとつての教育的価値や審美的価値を指摘している。さらに社会にとつて価値を論じるのがダスマンである。ダスマン（1984）は、自然の価値は、食料や毛皮といった商業的価値、ゲームやレクリエーションとしての価値、自然法則の発見だけでなく人類の健康や生命の維持に対する理解を促す科学的価値やその応用としての遺伝子資源としての価値、野生地域の景観や野生動植物の美的価値、生態系を維持している複雑なメカニズムを理解することによって得られる社会を運営する上での知恵の源泉としての生態学的価値をあげている。

しかし、これらの自然の価値は、牧口のいう様々な自然との交渉を通じて得られる価値の範疇を一步もでない。牧口はいっそう豊かな自然の価値をみているといえる。自然の豊かな価値をくみ出そうとすると、牧口のいう自然との多様な交渉が道標となると考える。

しかしこのような自然の価値が見出されたからといっ

て、それが実際の生活上で自然を保護するための歯止めになるかといえ、それはきわめて困難な状況である。現在の社会では、あまりにも経済的な価値が強いからである。その経済的な価値に打ち克つて、自然を保護するためには、規範性を確立しなければならない。都留(1982)は、その規範確立の前提として最も重要なことは、「もともと自然環境の価値は、対象者である人間がつくり出すものと考えべき」であり、「健康も幸福も美も、われわれが自ら創り出すという側面を強くもっているわけだが、環境の評価をこれらの価値と同じ次元にもち上げるような「価値の転換」が必要であることを指摘している。

牧口の場合には、一層明確に「価値の追求が人生」(3)であるという。そして「真理は創造する事は出来ない。……之に反して価値は創造し得る。……創造とは即ち自然の存在の中から人生に対する関係性を見出して之を評価し、更に人力を加えて其の関係性を特に増加することである」(81-82)と。したがって、自然の多様な価値は創造するもの「価値創造Ⅱ創価」であり、それが人生で

ある、と主張する。先に述べた、自然との多様な交渉が「心性の発達」、すなわち人間の側での努力を必要とするものであることを考えれば、(3)「自然からの価値創造こそ人生であり、そのためには人間の側で努力が必要であること、が重要になる。

柳(1982)は河川の改修工事に成功した経験から、自然保護運動の原則として重要なことの二つは、「人間が快適に暮らす」と思えば、他の生物も快適に暮らすような自然環境を確保してやること」を指摘している。牧口は「生存競争地論」のなかで、世界は経済的闘争時代に代わって、次に来るべきものは、人道的競争の時代に入ることを予測しているが、そのとき重要なことは「その目的を利己主義にのみ置かずして、自己とともに他の生活をも保護し、増進せしめんとするにあり。反言すれば、他のためにし、他を益しつつ自己も益する方法を選ぶにあり」(81-82)と、述べている。自然を自己と同等かあるいは自己よりも高い位置におく牧口の思想からすれば、当然の帰結として自然に対しても、(4)「他者への利益と自己への利益の相互利益を前提とする必要があ

ること、が導き出せる。

このように、現在の自然保護思想をめぐる議論を考えると、牧口の思想がいかに現代的な意義をもっているかを知ることができよう。

4 『人生地理学』の学問的位置づけ

地理学における意義

地理学の分野では、自然地理学の基盤を築いたのがフンボルトであるのに対して、人文地理学の基礎を築いたのはリッターである。リッターは『自然と人間の歴史との関係における地理学』(1882)を著し、地理が自然の発達や生活に重大な影響をおよぼすことを指摘した。人文地理学はさらにラッツェルによって、『政治地理学』『人類地理学』(1873)として発展した。

川喜多(1988)は、このラッツェル以後の地理学や人類学の経過を捉えて、以下のことを指摘している。ラッツェルやその弟子のセンブルによる『環境と人間』(1911)、また『気候と文明』(1915)で著名なハンチントンらが環境決定論的であったことに対して、多くの批

判と反動があった。その代表がフェブレで、彼は『大地と人類の進化―歴史への地理学的序論―』(1922)において、人類は環境に一方的・運命的に規定されるものではなく、むしろ可能性を開拓して環境を改変してゆくもの、であることを指摘した。同様の批判は、シュミットとコッパーズ(『民族と文化』、1932)によって民族学Ⅱ文化人類学の方でも起こった。しかしその後両分野では、環境決定論を叩くあまりに、人類と環境との関わりを探究しようする意欲まで減退させたように思える、と。

したがって、牧口が『人生地理学』を著した今世紀の初頭は、世界では環境決定論が支配的であったことになる。しかしそのようなことは知る由もなかったと思われる牧口が、先に述べたようにまったく独自に環境決定論を打ち破るような「人」と「地」との相対的・相関的關係Ⅱ「地人相関」を打ち立てたわけである。それは牧口が、いかに人間活動が地球に対して拡大してきたか、その実態を的確に捉えていたからではないだろうか。このことは、例えば「人類」の章で、他の動物に比較して人類が今や全世界にその棲息区域を拡大した事実を指摘

し、その理由を「その特有せる優等智識の結果として、種々の工夫を廻らして自然力に抵抗し、これに打ち勝ち、これを利用して自己の使役に供し……」(3-88)と、種々述べた後、「要するに、生物の膨張を抑圧する自然の勢力は、人類に対しては、はなはだ薄弱なるによるなり。かくて十五億六千余万の人類は、地球上の物質上の主権を握り、生物および無生物の広大なる全渾を制裁し、利用し、もつて……倍々増加して止まざるなり」(3-88)と、述べていることから明らかである。

しかし、『人生地理学』におけるかなりの部分は、環境決定論に近い表現が多い。このような牧口の表現を、宮田(1986)は「環境決定論に誤解されやすい文脈で理解してはならない。牧口が主張したかったことは、人類社会の生活は文明とともに発達し、それに応じて自然、地理の生活に持つ影響、意味も変化するということである」と述べ、同様の見方をしている。このようなことから、環境決定論を超越した相互作用系を捉える「地人相関」は、牧口の先見性として十分評価できるものと考ええる。

『人間生態学』としての『人生地理学』

人間が出現する以前の地球を生物生態系と呼ぶとすれば、現在の地球は人間の巨大な影響力が至る所に表れており、今や人間生態系と呼ぶべきものになってしまっている。環境問題の解決の目標の一つは、人間にとって最適な環境はどのようなべきかを探し求めることにある。このような意味で人間生態学は、人間生態系の実態、また望ましい環境を追求する意味に於いて待望される学問領域である。

生態学の源流は、近代生物学の場合と同様、アリストテレスの動物誌やテオフラストスの植物原因論にあると言われている。その後、長い間の博物学的な情報の集積の後、十八―十九世紀のビュフォン、ラマルクの仕事を経て、十九世紀のフンボルト、ダーウインにおいて自然誌的学問の頂点を迎える。フンボルトは近代地理学の祖として知られるが、彼が生活型を中心とした植物帯と気候帯を空間的・地理的法則性として一般化したのに対して、ダーウインが時間的・歴史的な観点から進化論を発

展させた。これらの業績を受けてヘッケルが『生物の一般形態学』(1866)のなかで関係学Ⅱ生態学として、今日の生態学の基礎を築いた。したがって、生態学、特に植物生態学はフンボルトの植物地理学にその淵源があることになる。そして、植物生態学、動物生態学が学問としての体系を整えるのは、二十世紀に入ってからである。

人間生態学は、一九二〇年代に入ってその基礎が社会学者のパーク(『都市』1925)やビュース(『人間生態学』1929)によって築かれたといわれている。しかし内容については、十分なものではなく、例えば、パークの人間生態学においては文化の問題などは、生態学の問題ではないとして含まれていない。即ちパークの人間生態学は、人間の植物的生態学的研究であったことが指摘されている。

しかしながら、人間生態学には未だ十分整備された学問体系は整えられていない。比較的最近訳出されたジョルジュ・オリヴィエの『人類生態学』(1977)を見ても生態学的手法を取り入れているだけで、人間生態学といえるようなものではない。彼が目標とする人間生態学で

は、パークと同様人間に対する自然の役割にしか言及しておらず、一応生態学の用語である個体群、適応、淘汰を用いて、人間の自然環境や人間環境への適応を述べているにすぎないからだ。

ではいったいどのような人間生態学が望まれるのだろうか。沼田による『自然保護という思想』(1984)、および梅棹・吉良による生態学の入門書として著名な『生態学入門』(1986)を基本にまとめると、以下のよう

に考えられる。

〈1〉人間の生活は、植物や動物の生活の上になり立っている。したがって、動物生態学が植物生態学の上に成立しているのと同様に、人間生態学は植物生態学を含むところの動物生態学をも含む体系でなければならない。ゆえに人間と動物、人間と植物、人間と無機的自然等との相互作用、すなわち自然に対する人間の役割、人間に対する自然の役割を含むような体系とする必要がある。

〈2〉人間を動物的存在として扱うだけならば、動物生態学の延長ですむ。しかし人間は文化的、社会的、歴史的、精神的存在でもある。人間を全体的に捉えるならば、

当然このような領域の問題も含まざるを得ない。

〈3〉人間主体—環境系を捉えるものでなければならぬ。生物による主体的な環境評価を問題にするのが生物生態学であるならば、当然人間による主体的な環境評価を問題にする必要がある。

このように人間生態学は、多義にわたる内容を含むことが要求されるが、実態はどうなのか。川喜多(1988)は、人文地理学や文化人類学の環境への関心を歴史的に考察して、「地理学では、人間生態学としての人文地理学」などというかけ声はときどきかかって、文化という包括概念への理解や関心は、むしろだんだん後退して現在に及んでいるように思われる」と、地理学の現状を分析した後、「一方においては、人間社会や文化を、環境と遊離して理解する傾向がある。他方では、たとえ環境への関心はあっても、今度は包括的なものとしての文化を解さず、その意味で文化の欠落した環境や社会への探求があったとみられる。それらの底流には、生態系ないし「社会—文化—環境」を、分析的な方法だけで処理しようとし、また物質・エネルギー的側面だけで解明し、

情報(「意味」や「価値」という側面を無視する傾向があったのではなからうか。すなわち、ホーリスティックなアプローチの欠如が窺われる」と、全体を総括している。生態学が日本に導入されたのは、一九二〇年代であること(今西、1988)から考えても、『人生地理学』において生態学的なアプローチが全体にわたってなされていないのは当然のことであろう。しかし『人生地理学』は、『人間生態学』が要求する「社会—文化—環境」を視野に入れたホーリスティックなアプローチ、また「人間主体的環境観」や相対的・相関的な「人」の「地」との交渉を捉えた思想(Ⅱ「地人相関」)に基づいて著されたものであることは間違いない。詳細な検討は今後必要と考えるが、『人生地理学』が人文地理学の先駆的な業績として評価されるだけでなく、『人間生態学』の世界における先駆的なものとして評価されてしかるべき資格を十分備えていると考える。

参考文献

R・アレシ「世界環境保全戦略」竹内均訳、日本生産性本部、

一九八二

今西錦司『生物の世界』講談社、一九七二

今西錦司『自然学の提唱』講談社、一九八六

梅棹忠夫・吉良達夫編『生態学入門』講談社、一九七六

川喜多二郎『環境と文化』、所収『環境科学Ⅱ人間社会系』

川村武・高原榮重編、朝倉書店、一九八九

熊谷一乗『牧口常三郎』第三文明社、一九七八

ジョルジュ・オリヴィエ『人類生態学』河辺俊雄訳、白水社、

一九七七

R・F・ダスマン『野生動物と共存するために』丸山直樹訳、

海鳴社、一九八四

都留重人『環境教育』岩波ブックレット第10、岩波書店、

一九八二

沼田真『環境教育論』東海大学出版会、一九八二

沼田真『自然保護という思想』(岩波新書)一九九四

半谷高久『地球化学入門』丸善、一九八八

半谷高久『社会地球化学』紀伊国屋書店、一九六六

牧口常三郎『人生地理学』聖教新聞社、一九七一

牧口常三郎『創価教育体系Ⅱ』聖教新聞社、一九七二

宮田幸一『牧口常三郎の世界ビジョン(1)』『第三文明』第三

文明社、一九九四、七、三六—四五

村尾行一『地人相関』より見た環境問題『東洋学術研究』

一九九〇、二十九卷二号、七五—八二

村尾行一『共生』に対する人生地理学の視座『東洋学術研

究』一九九三、三十二卷二号、一二—一四〇

柳哲雄『創られる風景』、所収『環境イメージ論』古川彰・

大西行雄編、弘文堂、一九九二

(やまもと しゅういち・創価大学助教授)